

るが、これは明治十年が正しい)、漸次改良進歩ヲ促ス。抑此陶器タル茶褐色ニシテ雅致アリ。又頗ル堅牢ナルヲ以テ、水道樋、敷瓦、水瓶、徳利ノ類ニハ所用極メテ便利ナリ。蓋シ去ル明治十年内国勸業博覧会中、勸商局并識者ノ垂示ニヨリ洋州所用ノ敷瓦ヲ製シ、既ニ輸送試験中ナリ。左ニ其産額売上高ヲ示ス。

伊部陶売上表

| 原 価      | 売 上 高        | 諸 費       | 純 益          |
|----------|--------------|-----------|--------------|
| 四千三百四錢四厘 | 四千八百五十円三十錢三厘 | 百八十二円八十九錢 | 五百六十四円三十九錢一厘 |

改選所は明治十四年のはじめごろ廃窯し、新らしく「黄薇窯」と称して発足した。そして、このときの組員は木村平一郎、森弥一郎、金重仁平、木村松三郎、木村龍平、佐藤嘉三郎、それに改選所の出資者であった大饗為五郎、この七人が出資者で、経営は主として木村平一郎が行った。ところが、これもうまくいかず二年後の明治十六年ごろに解散した。

岡山県勸業課発行の『第七回年報』（明治十九年八月）の和氣郡の項には、本窯五基とあり、その製造物として無釉物一、二九〇円とある。これは明治十八年度中の備前焼の製産高である。これで見ると、前の十一年度の製造高に比べて、二、八一三円強も減少している。つまり製産高が三分の一強に減っているわけである。「大日本窯業協会雑誌」一八号（明治二十七年二月）

に「伊部の衰頹」と題して、次のような記事がでている。

古来伊部陶器の製造を以て、其名世に高き備前国和氣郡伊部村は山陽鉄道敷設以来（註 明治二十四年三月十八日岡山以東開通）は汽車にて通過し、同村に入込む人減少せしより村内不景気にして、各陶器店は勿論、其他商店とも漸次衰頹せり、

とある。いままで陸上の交通は是が非でも国道である伊部の街を通過していた上り下りの旅行者は、そのほとんどが汽車を利用したから、鉄道開通以来伊部は急に寂れて、備前焼の売れ行きもガッタと落ちた。

こうした状況を視察した山口県小野田の立野列助は『大日本窯業協会雑誌』二八号（明治二十七年十二月）に「伊部陶業ノ衰退並ニコレヲ挽回スルニ付キテノ企望」と題して、次のように報告している。

余ハ伊部陶場ノ日ニ益々衰退シテ、其産額ノ日ニ益々少数ニ達セルハ実ニ遺憾ニ堪ヘザルヲ以テ、其衰退ノ理由ヲ掲ゲ、之ガ挽回ノ方法ヲ究ムルコトハ、嘗テ其工場ヲ観覽セシトキヨリ常ニ忘レザル一事ナレドモ、陶場ニ在リテ視察セシ時、日ノ短キ為メ記述、或ハ粗漏ヲ免カレザルモ、次ニ述ル一二ノ因由ハ大ニ其衰退ヲ助長セリト云ハザル可カラズ。

凡テ工業ハ主トシテ生存競争ニ依リテ消長スルコトハ争フベカラザル事実ニシテ、古来天幸ヲ得タル地方ハ若シ利用ヲ誤ラザレバ大ニ其命運ヲ進メ得ベキモ、斯ル地方ノ人ハ兎角安泰ニ甘ンジテ進取ノ力ナキガ如シ。是レ和蘭、瑞西ノ如キ天眷ヲ得ザル地方ノ發達ガ伊太利ノ如キ天眷ヲ得タル地方ノ發達ニ優レル所以ナリ。常滑

ノ土管ハ当時非常ノ盛況ナルモ明治ノ初年ニ遡テ其地ノ情況ヲ見レバ思ヒ半バニ過ギシ。今常滑、万古及び伊部三地方ニ関ル前数年間ノ製造高ヲ挙レバ次ノ如シ。

|       | 常滑                   | 万古                  | 伊部                 |
|-------|----------------------|---------------------|--------------------|
| 明治二十年 | 一七〇、三〇〇 <sup>甲</sup> | 三〇、〇九五 <sup>甲</sup> | 未知                 |
| 同 廿一年 | 一二〇、三五〇              | 三五、七七九              | 〃                  |
| 同 廿二年 | 一〇〇、四〇〇              | 三五、〇三二              | 〃                  |
| 同 廿三年 | 八〇、四五〇               | 二二、三九三              | 〃                  |
| 同 廿四年 | 八四、二五〇               | 二九、七四三              | 三、二二二 <sup>甲</sup> |

近数年間ニ於テ、其産出額ノ多少ハ斯ノ如ク一見直ニ其理由ヲ知ルコトヲ得ン。明治ノ初年大坂水道工事ノトキ有志家アリ、堺ノ近傍ニ於テ、常滑風土管ノ製造ニ着手セシガ、或ル事情ニ依リ之ヲ本地(常滑)ニ移セシ以来、土管ノ利想同地ニ普及シ、或ハ会社ヲ建テ、或ハ自己ノ持窯ヲ改造シテ擴張ニ余念ナク、各自東西ニ奔走シテ、其需用ヲ拯メ、十数年間辛苦経営ノ結果ハ近数年ノ間ニ常滑ヲシテ土管水瓶ノ本場タル名誉ヲ邦内ニ伝播シ、亦敵ナキニ至ラシメタリ。

万古ハ百六十年以前ヨリ父祖ノ遺業ヲ受ケツ、アリシモ、近時大ニ外国輸出ノ道ヲ開キ、組合ヲ設ケ、其職ヲ分チテ意想模型兩ナガラ時好ニ遅レズ、孜孜経営ノ結果ハ其進歩ヲ助ケ意匠等ノ点ハ常ニ我国石器ノ首位ヲ占ムルニ至レリ。

獨リ伊部ニ在テハ然ラズ、中古時代一二ノ作ハ稍々見ルベキ者モアリシガ、現今所製ノ者ハ取ルベキ者少ナキノミナラズ、其産額僅少ニシテ、之ヲ回復スルノ意思ナキ陶家半数以上ニ及ベリ。是レ其地ノ陶家ニ生存競争ナキノ一事ニ源由セズンバアラザル也。

蓋シ常滑陶家ハ其利アルヲ見テ一層之ヲ高メントノ企望ガ其擴張ヲ果セシナリ、万古ハ其生活上ノ必要、地利ノ便ガコノ拡張ヲ助ケシナリ。伊部ニ在リハ生活上ヨリ云バ苦ンデコレヲ維持擴張スルノ必要アラザリシ為メニ萎微セシナリ。何ゾヤ伊部陶家ハ從來半農半陶ノ生活ヲ導キシ一事実ガ礎ニ此地方陶業ノ衰微ヲ来セシナリト云ハザル可ラズ。夫レ然リ実ニ然リ、余ノ此陶場ニ在リテ、某氏ニ面接シタルトキニモ其發達セザル一大理由トシテ、此答ヘヲ聞シナリ。陶業者夫レ自身ガ既ニ此依頼ヲ有ス。伊部陶場ノ振ハザル豈偶然ナランヤ。

当時我国ノ商工業界ハ実ニ十数年前ノ有様ニ非ズ。朝ニ新ナルモノハ既ニ陳腐タルヲ免カレズ。此際ニ処シテ一ノ革新ヲ期スルニハ智力足り、資本アリ、耐忍ニ富ンデ、許多ノ困難競争ニ打勝タザレバ効果ヲ収ムルコト少キニ、伊部陶業者ハ智力ノ開発ヲ力メズ、耐忍ニ薄ク、利アル間ハ此業ヲ営ムモ、一旦工業ノ恐慌アリテ其利薄キニ臨ミ、コレヲ改良シテ、其利ヲ益スコトヲ勉メズシテ容易ク失望シ、農業ヲ営ムノ容易ニシテ、且安全ナルニ若カズトナシ、漸次コレニ移ル者多シ。是レ大ニ陶場ノ萎微セシ一大原因ニ非ズシテ何ゾヤ。然シナガラ伊部陶業モ始メヨリ全ク起業心ナキニ非ラズシテ二三ノ会社ヲ興シタルコトモアリシガ、不幸ニシテ失敗シタリ。其失敗ニ懲リテ亦踵グノ勇氣ナカリシナリ。是テ誤レルノ甚キ者ト云ハザル可ラズ。蓋シ其失敗セルハ投機者流ノ輕學瞞着ニ由レル者ニシテ、経営手段ノ不完全ナルト、技術ノ思想ノ乏シキトニ坐スルナリ。決シテ落胆スベキノ真価ナシ。余ヲ以テ見レバ、伊部石器ノ材料タル日吉土ハ我国石器原料中尤モ有望ナル粘土タルコトヲ信ジテ疑ハズ、凡ソ単味ヲ以テ自由ニ操作スルコトヲ得テ、其供給ノ無限ナル石器原土ハ伊部原土ヲ置テ他ニ多クコレヲ望ム可ラズ。伊部陶家ハ如斯天幸ヲ有シナガラ其所製品ハ粗雜物ヲ造リ、或ハ奇僻家ヲ樂マシムルニ止レルハ実ニ歎ハシキ事ニ非ズヤ、万古、常滑ノ原料ハ決シテ伊部ノ如キ良好ノ原土ニ非ズ。

(常滑ノ赤土、万古土ハ或点ニ於テハ優ル処アルモ)而モ其數年來不撓ノ結果ハ実ニ有用ニシテ、且巨額ナル産出ヲ為スニ非ズヤ。而シテ余ノ該陶業者ニ向テ望処ノ件ハ実ニ簡單ニシテ、僅ニ次ノ数件ニ過ギズ。今コレヲ挙レバ、

(一)當時ノ位置ニ就キ固守満足スルコトナク不撓進取ノ主義ヲ執ルコト。

(二)先ヅ水箆法、成型法等ヨリ着手シテ漸ニ窯ノ改良ニ及ボシ、製品ノ品質意想ヲ一変スルコト。

(三)速ニ陶業組合ヲ設ケ規約ヲ立テ、所得ノ幾分ヲ醸出し、陶業ニ関スル進歩ノ方法ヲ講ズル為メ、官ニ乞フテ其助力ヲ仰ギ技師ヲ招テ其意見ヲ叩キ、或ハ試験セシムルコト。

(四)改良ハ凡テ一時ノ利ニ泥マズ、勉メテ利ヲ數年ノ後二期スベキコト。

(五)新ニ有色釉葉ヲ施シタル上等裝飾品ヲ製シテ、伊部石器固有ノ本価ヲ顕シ、併セテ土管其他工業用或ハ日用必需品ノ安価堅牢ナル者ヲ盛ニ製出スルコト。(此点ニ関スル試験成績ハ他日記載スベシ)

(六)大物ノ製造ハ伊部土尤モ適當ナレバ大ニ其意想ヲ改良シ盛ニ之ヲ製出スルコト。

以上ノ諸件ハ実ニ伊部陶業者ノ名譽ヲ回復シ、天賦ノ利益ヲ永遠ニ収ムルニ就キ避クベカラザル要件ナリト信ズ。今ニシテ此改良ニ着手セザレバ、數年ノ後只ニ其利ヲ他ノ石器業者ニ壟斷セラル、ノミナラズ、益々其製造ノ縮少ヲ來シ、遂ニ其名ハ歴史上ノ記憶ニ止ルニ至ランコトヲ恐ル。該地ノ陶業家一考ノ勞ヲ吝ム勿レとある。

また、明治四十年に国立東京博物館の技手藤谷栄尾が伊部の窯元を視察して、その報告書が「建築工藝叢誌」第五号(明治四十五年六月十五日)に掲載されている。

去る四十年盛夏の候、予は官命によりて、岡山縣に出張し、伊部の現況をも視察せしに、乃ち上述の如き有様にして、現存せる製陶家と云ふは左の如し。

|    |     |        |     |    |     |    |     |    |     |
|----|-----|--------|-----|----|-----|----|-----|----|-----|
| 森  | 琳三  | 森      | 榮太郎 | 木村 | 六郎平 | 大饗 | 千代松 | 木村 | 市三郎 |
| 金重 | 楨三郎 | 木村     | 藤太郎 | 森  | 菊太郎 | 金重 | 勉   | 永見 | 駒造  |
| 久本 | 才八  | (職工なり) |     |    |     |    |     |    |     |

右の内、轆轤に上手なるは、金重楨三郎及び工人に藤原幸太郎(當時二十七歳)細工の上手は永見駒造(當時六十一歳)等なり。

現在の窯は、應永年間に築造したりと伝える前述の大窯の外、不老山に數窯あり。その一窯は森氏の専有なるも、他は悉く共有の窯なりと聞く。

(中略)

予、岡山縣に出張の砌、岡山市の骨董商津田龜三郎と云へる人を其家に訪ひて伊部陶器の標本となるべきものを一覽せしが、其際、店主の談に、明治十二、三年の頃、同家に伊部陶工中の良工と聞えたる者數名を招きて、御庭焼の模造品を製造せしめ、其多くは之れを海外に輸出したるが、其作品の今も尙ほ家に残れるものありとて、倉庫中より三十六歌仙の一體を取出して、之れを示せり。是れ即ち前に述べたる池田男爵家所藏の置物を模造したるものにして、高さ凡六寸あ